

広島俳句倶楽部

令和三年三月作品集

姉

ちどり

昨年十一月、姉が六十九才で永眠しました。アルツハイマー病になり二十年間の闘病生活でした。次女の姉が幼少期に亡くなり、私達は二人姉妹として生きてきました。とてもやさしく、スポーツマンで美人の姉でした。

姉との六十余年をしっかりと記憶に留めておこうと思います。十句の俳句にまとめました。

お姉さん、ありがとうございます。お義兄さん、姉をずっと支えてくれてありがとうございます。

下萌や男子の中の草野球

日焼してテニスボールを追ひにけり

奥山の姉に呼びかけ葺狩

早起きの姉の作れる根深汁

姉の家池に睡蓮咲いてをり

兄のする寄鍋の湯気立ちにけり

母が家に姉と見つけし路の薹

山茶花や姉を支へて散歩する

室の花紅差す姉の眠りけり

買物に姉の形見のコート着る

《作品鑑賞》

亜矢

「姉」は、作者とお姉さん夫婦との思い出が平明にさらりと詠まれた作品である。しかし、作者とお姉さんとの強い絆が十分伝わってきて、それが十句目に集約されていると思う。

早起きの姉の作れる根深汁

元気な頃のお姉さんだろうか、働き者だったのだろうと想像する。熱々の根深汁をすする作者の姿はとても幸せそうでほほえましい。

兄のする寄鍋の湯気立ちにけり

闘病中のお姉さんにかわりお義兄さんが寄鍋を作った。蓋を開けた瞬間、湯気が立ち上る。姉妹の幸せそうな姿が伝わってきて、目に浮かぶようである。

山茶花や姉を支へて散歩する

姉への愛が痛い程伝わってくる句。それは山茶花だからに他ならない。きっと会話がなくても通じ合える仲だろう。

雪と生きた日々

松本恵和

雪は私の成長の一ページで、冬は雪の中の生活だった。今では東北の雪も少なく、今年の様な雪は珍しい。私の子供時代は、雪と戦い、雪と戯れた。一本道を転びながら学校に通った。箱ヅリで坂道を滑り、積雪でかまくらも作った。しかし、東北の雪国と違い、雪装備はいか減であった。父母は忙しく、私たち遊ぶ暇はなかった。私達は子供同士で遊んだ。その雪も今では良い思い出として残り、心を躍らせるのである。

鉈を振る父と登りし冬の山

枝の雪落ちて転がる雪の玉

埋火を熾し囲炉裏に灰の飛ぶ

囲炉裏端濡れた長靴並べ干し

妹は炬燵の母のいつも横

野も山も青く輝き雪の夜

雪晴に戸を開け放ち掃き掃除

寒曳山スキー担いで登りけり

人型となりて樹氷の迫りくる

堅雪の田んぼの上を走りけり

《作品鑑賞》

亜矢

「雪と生きた日々」は、作者の自然や家族に対する愛情がひしひしと伝わる作品である。子供時代の思い出を十句にまとめているのだが、数十年前の出来事と感じさせない程、新鮮味に満ちている。

妹は炬燵の母のいつも横

姉である作者の、妹をうらやむ気持ちと妹を愛する気持ちの両方が伝わってくる。時には妹にかわって、自分が母親の横にいたかっただろう。下五に作者らしさを感じた。

野も山も青く輝き雪の夜

私は雪国に住んだことがないので、なんと幻想的な景なんだろうと驚いた。自然の美しさと厳しさが伝わってくる。一枚の絵のようだ。

雪晴に戸を開け放ち掃き掃除

掃除をしているのは姉妹だろうか。毎日の営みが自然に寄り添っていて瑞々しい。

佐保光俊

一燭を点せば雪の降つて来る

まつすぐに雪降つてゐる月夜かな

村上正人

高枝の雪の零れて散りにけり

雪解けの霰に池の波紋して

高尾ひとみ

雪花のつぎつぎ波に消えにけり

まどろめば夜の雪すこし積もりけり

秋沙

粉雪舞ふ中洲に鷺の佇めり

青空に白雲流れ遠雪嶺

阿姫

漱石の本読みをれば雪の舞ふ

雪だるま作つてゐる八十路中

あざみ

雪やんで足跡づくけもの道

古き竹焼く音のして牡丹雪

亜矢

小雪降る母の支度を整へて

原稿を書いては消して夜の雪

井藤希

暮れてゆく庭に向かひて雪見酒

雪の声眠れぬままに本を囲ぢ

栄吉

ヴエトナムの友喜びし朝の雪

雪一片姿留めし指の光

大橋博子

歳時記をめくる夜半の窓に雪

改札を出でて路肩の雪深き

暁子

降りしきる雪を照らせる街路灯

屋根からの雪解けの音続きをり

新庄憲彦

頂に雪の残りし岩木山

白鷺の雪の蓮田に舞ひ降りぬ

すみれ

雪の日の山の家へと子を招く

冠雪の山の大きく近く見ゆ

知佳子

雪原に大きな鳥の降りて来る

雪原を横切り村へ歩くなり

ちどり

しんしんと雪降る坂を母が家へ

雪の朝運動場で鬼ごっこ

友岡崇山子

マニキュアを塗る手を止めて雪を見る
雪の朝等間隔の靴の跡

ふじ女

凍る毒遊んで放る雪女郎

雪晴れを吸い込み朝の電車行く

松田裕子

しばらくは硝子戸越しに雪を見る
まだ深く雪の残りて固さかひ

美耶

音もなく出窓に積もる夜の雪

明けの雪ベランダの薔薇濡らしをり

森口良樹

日の暈の鈍き光に雪の降る
まだ誰も通らぬ小路雪の朝

綾乃

前照灯しづかに雪の降つてをり

英一

大木をどきりと倒す雪重し

遠藤さつき

山頂に残雪見えて遙かなり

大畑恵

ちらちらと日差の中の昼の雪

かこ

春の雪ちらちらと舞ふひと日かな

上島康子

初雪に茶毘の煙の混じりけり

紀英子

雪降つて人それぞれの思いかな

熊谷ゆり子

雪載せて停車場にバス入り来る

桑門わかこ

朝より刻々と雪積もりけり

白神陽子

大屋根に丸みを帯びて雪の積む

高嶋絹代

雪晴や真白き山に囲まれて

民

雪深し肩幅ほどの道続き

ちかこ

吹雪く朝海に背を向けバスを待つ

津田玲子

風花を手を受けたればすぐに消え

撫子

雪降るや寝つけぬ子らの声のして

穂高

雪の声目覚めてはまた眠りけり

幹

山の道木々の間に雪残り

みさ子

昼下り庇の雪の溶け始む

宮田保江

雪道の大き根開き覗きたる

やす保

目覚めれば車にうつすら春の雪

山崎桂子

窓の外うつすらと雪積もりたる

山野ウタ

室堂の雪のしづけさ星降つて

寒月のときに通りし大樹かな

春の雪峠の笹に積もりけり

夕月の昇つてゆける木の芽かな

木々の芽に月の残れる朝かな

紅梅へ奥津城の道通ひたる

白梅にしばらく止まぬ雨となる

梅の傍しづかに鶺鴒降りてくる

白梅の暮れゆく空に雲のなく

この道のここの赤椿が好きで

如月の雲ゆうゆうと通りけり

月の無き夜の臘梅の香りけり

吾が鼻に春の訪れ感じたり

雁木にて靴底濯ぐ春の川

啓蟄や雨の後には鳥の鳴き

春林のすみずみに日の差しにけり

どこまでも機影輝き春の夕

夜の梅の香る坂道上りたる

大試験子を送り出す夜明け前

校門を入れれば右手に白木蓮

先生の歌に送られ卒業す

行く道の真正面より雪しまく

臘梅の夕闇になほ香りたる

早咲きの梅へと坂を上りゆく

山中に雪解け水の音のして

白梅の風のさなかに香りたる

夜の更けてうつすら春の雪積もる

残雪の林に朝の日の上る

残雪の林に風の音しきり

身じろぎをせずに見てゐる春の鳥

木の芽雨いつやむとなく降りづく

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

川岸に白と黄色の水仙花

さざ波の寄せくる川や春浅し

白椿赤き椿の横に咲く

咲き満ちて彼岸桜の匂ひたり

川風に花びら揺れて金盞花

前庭に琴弾鳥の来てるたり

鶯鳥の木にぶら下がり花を食ふ

木から木へ飛び交ふ鶯や花散らし

琴弾鳥ひと声鳴いて飛びにけり

川岸にしとしと降る花の雨

秋沙

雪積みし山の白さに声を上ぐ

除雪して身の丈ほどの雪の壁

潜り浮く草戸稲荷の河鳥

菜の花や牧を流るる雲早し

山の水引きたる池に春の雪

煙立つ山に向かひて雛流す

瀬戸の海声の澄みたる春の鶯

被爆して七十余年蜩極く

春の旅太平洋を見てをりぬ

春の星仰ぎ傘寿の山の宿

阿姫

コンビナート雪の中なり炎上げ

風吹いて彼岸桜の揺れにけり

庭先を賑はせてをり松笔鳥

鶯の声のしてゐる山の畑

纜のたわみに来たるつばくらめ

春潮にすこし沈みて牡蠣筏

竹囲して互咲けり庭の隅

人去りしあとのふらこ揺れてをり

大杉の高きに古巣五つ六つ

石畳沿ひに大きく萬草育つ

あざみ

裏道をゆつくり歩き春の星

閑演の前の静けさ春浅し

蛤を煮る音のする夕べかな

早春の枇杷の木に鳥群れるたり

ずぶ濡れの革靴を干す遅日かな

学校の日の丸なびき春の草

海に沿ふ単線に見て春夕焼

春眠の父起こさむと歌うたふ

啓蟄の廊下に置かれ飼育箱

薬袋の畳に置かれ暮の春

亜矢

湯治場の雪の露天に浸かりをり

泉邸の門に匂へる鉢の梅

泉邸の茶室の前の梅の咲く

梅園の小道の柵の影なせる

梅林を歩ける鳥の名を知らず

梅園の日向の椅子に座りたる

湧水の流れ込んだる春の池

春の風池の石橋吹きにけり

落椿留まつてゐる池の縁

椿散り傍に折鶴落ちてをり

井藤希

白木蓮古き土蔵の残る町

水音の微かに聞こえ花木蓮

紅椿西街道の閑所跡

堰を越す音の響いて春の川

花大根トタンの板に仕切られて

菜の花にペットボトルの水をやり

春日傘セーラー服の二人なり

春の川発表会の服のまま

旅立のフエリ―乗り場に辛夷咲く

花水木上官そつと送りたり

栄吉

拝殿に薬缶のたぎる雪の朝

レコードの針とびとびに細雪

ことごとく切られた枝に梅の花

味噌蔵の窓に懸かりて春の月

春の灯の照らしてゐたり瓶の底

春風や樽の木栓締める音

春の雨川面に水輪数多く

春の風星のオブリエのくるくると

春の夜の遠くに聞ける汽笛かな

塀際に植ゑたる花菜明りかな

大橋博子

グラウンドの足音聞こえ春浅し

潮騒へ椿の道を下りけり

峠道下れば見ゆる春の海

暮れてゆく海へと降つて春の雪

幼子の追うてゆきたる春の雪

鯉浮いて春鴨と餌を食んでをり

今もなほ同じ茶箱に雛納む

木々芽吹く坂道多き通学路

囀や林に午後の日の届き

庭の木に巣箱かけたる旧家かな

暁子

引つ越して空家となりし外は雪

根付きたる隣家のクリスマスローズ

蔵を解く土の匂や春兆す

下向くも上向くもあり梅の花

白梅の上に白梅空青し

階段の下より春の風の吹く

逸早く木瓜の咲きたる庭の隅

一列に堇の咲いて鄙の宿

牡丹咲くその花びらの薄く濃く

ばうたんの鈴置きしとき床に散る

新庄憲彦

木の皮の剥がれ落ちたる斑雪

春寒の海をしづかに船進む

投げ入れのフリージア置く枕元

スモホ打つ指の早さよ雛の客

はくれんの咲きたる家を訪ひにけり

止めようか出かけようかと春時雨

手摺持つその手に近き沈丁花

堀の内八方に伸びる花ミモザ

鳥の来て止まる枝あり春の風

鉄塔に巣作り始め鴉かな

すみれ

太木と雪を流るる十勝川

どの窓も灯りの点いて雪の宿

雛飾る幼子の足小さきかな

通学の道に開いて紫木蓮

風吹いてそれぞれに向く雪柳

出雲路に架かつてるたる春の虹

山峡の雲動かざる大桜

鶯の声のしてゐる八雲山

糠雨の止むことのなき山桜

山桜しきりに沢へ散りにけり

知佳子

幼子と法事の後に歌留多取り

母が家にかたまつて咲き福寿草

小流れの雪解水汲み墓洗ふ

はくれんの堀より高く咲き楠ふ

三日ぶり母訪ねれば桃の咲き

はや姉の四十九日や紫木蓮

母が家の前に菜の花明りかな

菜の花を束にして生け姉の墓

歩行器の母の見る前畑を打つ

幼子の萼の花を見つけたり

ちどり

窓といふ窓開け入るる春の風

川土手に土筆とる龍二つ三つ

春草やあぜ道にある猫車

垣根越し見えて香りて沈丁花

ブランコのどの子の空もみな青く

身ざれいに老いて行かんとすみれ草

横隔膜広げて花を嗅ぎにけり

約束の流れしままや春の川

卒業の少女の光ずは髪を切り

青臭きそら豆潰し餡にせり

強東風やチエーンススタンド横たわる

春炬燵最終巻とシャツとガム

啓蟄や開店時間前の女子

足踏みの靴の春塵バトンパス

黄塵やスコアボードの遠き空

カバンより弁当と卒業証書

ものの芽やアイドリングの終わる場所

春雨や盗難防止のクラクション

うどん屋の日めくり赤い字の春分

橋のない対岸広く春の野よ

てんてんと猫の足跡雪の朝

薄氷の木の葉を乗せて溶けるたり

雪解川中洲に分かれ流れをり

立ち止まるその足元の春の草

沈丁の花を横切り母を訪ふ

風を受け日の光見て弥生かな

縮緬の雅樂器を係へ雛吊るす

若芝に座してしばらく語りたる

学食に張り出してあり「あさり汁」

パンジーの色とりどりの交差点

友岡葉山子

ふじ女

松田裕子

初雪のひらひら舞うて消えてゆく

春曉やエンジンの音聞こえる

梅咲いて村の外れの一軒屋

一輪の梅の香の光雲のなく

四方より梅の香れる寺の庭

海岸へ松の張り出し戻る

春の鳥大樹の傍を飛びにけり

雪解の空青々とありにけり

揚雲雀峠の先に見ゆるなり

春霞灯火うつすら照らしをり

美耶

景牡丹の茎立ちてなほ玄関に

バス停の空瓶に挿す花櫓

釣糸を振れば公魚はづれ落つ

一枝を部屋に切つたる庭の梅

老幹の洞の深さよ草萌ゆる

水音の近づくごとし春の川

参道の左右に散つて藪椿

鳥の巣へ到る山道いく本も

鉢植を董に替へて美容室

ほうじ茶と鶯餅の三時とす

森口良樹

櫓に乗り親子の声の響きをり

編物の手をとめて聞く笹子かな

カレンダーの二月をめくる朝かな

母の忌に雛の準備を始めたる

つくづく一塊に生えてをり

土手の坂足踏ん張つて土筆摘む

蕨餅色を見つめつ粉を混ぜず

蜆汁塗りの器と塗りの箸

花海棠父またそこに佇めり

宮田保江

コナ禍も春はしづかに訪れし
雛の日は忘れられない妣忌日
紅椿我が背を越して咲きにけり
暖かき風に包まれ杏咲く
菜の花を美しと言ふ娘居り
三桎のまんまるの花なつかしく
縁側に祖母と眺めし山桜
訪ね来て枝垂桜の下に居り

大畑恵

手鏡に二月の空の映りたる
紅梅の小貝のごとく散つてをり
梅二月雲のちぎれて流れけり
春眠や母の足音してをりぬ
沈丁の花のこぼれて雨の昼
花咲いて師への手紙を書いてゐる
花の庭母の歩みに令せをり
木の苗を植替へてゐる日の暮るる

桑門わかこ

主役取り一室が付き祝ひ蘭
路地裏に秋刀魚の匂ひ漂ひて
雪しまく背ナを丸めて就く家路
引く綱に獅の三匹跳ね上がる
梟の丸き目に差す月の影
梟の獲物に向かふ目の怖さ
俺の死にどこかで小さき董咲く

英一

佗助や蓋煮き急須捨てかねて

水温む母の掌背ナにあるごとし

花種を蒔いて印の石を置く

白椿散歩の歩幅定まりて

燕来る棚を付けたる深廂

すれ違ふ人と話して桃日和

鳥帰る独り暮らしの人多し

白神陽子

深雪晴祠にとどく鳥の声

妹と河津桜の下に立つ

春の雨傘を斜めに差してゆく

白煙に機影隠るる野焼かな

野火叩く簪に残る匂かな

春潮に広げてゐたり四手綱

白魚の綱を飛び出す二三匹

山野ウタ

冬北斗高きひとりの家路かな

子と作り雪のうさぎを持ち帰る

息止めて赤き椿の散るを見る

信樂の鉢に三色堇植う

鬼棠螺小さきナイフでねじ切りぬ

虎杖を噛んでむかしのわが町や

綾乃

大地から春の息吹の生まれくる

牡丹の芽紅の確かな寺苑かな

日の翳り浮かび上がりし桜かな

坊守の計報を聞いて春ひと日

春分の雨の予報の氣に懸かる

紀英子

留守番に午後からの雪降りつく

長靴で大通りまで雪を踏む

屋根にまで除雪の雪の届きたる

雪沓の三足並ぶ軒の下

氏

自転車の轍ひとすぢ雪の朝

春鴨のしばし列成す昼の川

大試験いま弁当を開く頃

石垣に点々と咲く堇かな

撫子

病床の母に見せたる雪兔

登山道抜けて見上げる花ミモザ

うららかや車窓より海眺めたり

上島康子

庭園の日陰に雪の残りたる

大輪の白椿咲く我が母校

バス停のベンチの下に董咲く

遠藤さつき

肩並べ父と歩きし雪の道

雪解の水いく筋も岩伝ふ

初音聞く耳を澄ましてもう一度

穂高

春疾風身を屈めては歩くなり

窓越しの日差を受けて子猫寝る

かこ

雪の積む畠から野菜掘り出しぬ

春の月山椒魚の棲む里に

熊谷ゆり子

落葉松の道に待ちたる雪女

昼月に庭の桜の開きけり

高嶋絹代

廃校の碑に散る椿かな

椿落つ幽かな音のつづきをり

ちかこ

値札見て菱の横を通りたる

真つ青な空よ桜よ良き日かな

津田玲子

赤椿地にありてより鮮やかに

声聞いて見上げる軒の初つばめ

幹

新聞を寝床に読んで雪の朝

雪の日数指で数ふる居間の声

みさ子

ひるがへる景の裏白し春一番

春の昼顔向き令せ本を読む

やす保

車窓から一瞬見えて山桜

久々のランチの席の桜餅

山崎桂子